

Introduction To Sumerian Grammar シュメール語文法入門

Volume.II
名詞連鎖
代名詞と指示詞
名詞修飾格:属格と様格

Daniel A Foxvog
ダニエル A フォックスヴォグ

Translated by uyum
訳 ゆー

INTRODUCTION TO SUMERIAN GRAMMAR

DANIEL A FOXVOG

LECTURER IN ASSYRIOLOGY (RETIRED)

UNIVERSITY OF CALIFORNIA AT BERKELEY

Revised January 2016

Cuneiform Digital Library Preprints

<http://cdli.ucla.edu/?q=cuneiform-digital-library-preprints>

Hosted by the Cuneiform Digital Library Initiative (<http://cdli.ucla.edu>)

Editor: Bertrand Lafont (CNRS, Nanterre)

Number 2

Title: "Introduction to Sumerian Grammar"

Author: Daniel A. Foxvog

Posted to web: 4 January 2016

目次

第4課	名詞連鎖	1
	バフブリーヒ（所有複合語）修飾	6
	コピュラ終止連鎖	6
	前置形容詞	7
	覚えていて	7
第5課	代名詞と指示詞	9
	独立代名詞 (§90-99)	10
	所有接尾辞 (§101-110)	11
	所有代名詞の形	11
	所有代名詞の用法	16
	指示詞の要素 (§133-138)	20
	-ri あの	21
	-e これ、それ	21
	-še その近くの	21
	ur ₅ これ	22
	疑問代名詞 (§111-127)	22
	再帰表現 (§129-132)	23
	不定形容詞 (§128)	24
	関係代名詞	25
	人称代名詞の形のまとめ	26
	独立代名詞 (§91)	26

所有代名詞 (§101-110)	27
覚えていて	28
第6課 名詞修飾格: 属格と様格	29
属格 (§161-168)	30
属格の構造	30
複数属格構文 Multiple Genitive Constructions	31
属格後置詞の形	32
属格と位格の比較	36
イレギュラーな属格のパターン	37
様格 (§214ff.)	41
覚えていて	42
練習問題 1	43
名詞、代名詞、形容詞	43
練習問題 2	44
名詞の複数形、所有代名詞と指示代名詞	44
練習問題 3	45
名詞修飾格: 所有代名詞と指示代名詞	45
音節記号価表	47
文献	49
索引	51

2 第4課 名詞連鎖

必須 必須
名詞 + 格

これから例示する名詞（および動詞）連鎖では、文法分析はプラス（+）でリンクされた語彙要素および文法要素の並びとして、想定される正書法の綴りはハイフン（-）でリンクされた記号価の並びとして示します。ここでは、語幹と膠着的な文法接辞がどのように結合し、音韻的に影響し合うか、そしてその結果生じる各連鎖が、最終的に書記体系によってどのように表現されるかに特に注意してください。たとえば、所有格および指示格の接尾辞 *-(a)ni* および *-bi* の最後の */i/* の母音が、複数形マーカ *-(e)ne* の前で規則的に削除されること、また、接尾辞 *-(a)ni* または *-(e)ne* の最初の */a/* または */e/* が、先行する要素が母音で終わる場合は存在しないことに着目してください。

まずは {*gal+a*} を *gal-a* ではなく *gal-la* のように、母音を記すときに音節記号を使って語根の最後の子音を「拾う」ことを見てみましょう。また、文法的な文脈が異なる場合、同じ音節を表記する際に、特定の記号を選択することもあります。例えば、*ne* ではなく *né(NI)*、*bi* ではなく *bé(BI)* という表記はどのような文脈で見られるのでしょうか？ これらの異なる表記は、どのような文法情報を伝えているのでしょうか。ある種のシュメール語の正書法は、形を正しく理解する手がかりを与えるために意図的に作られた可能性が高いのです！

連鎖要素	綴りと意味 ¹⁾	格と追加接辞
dumu+∅	> dumu 息子は (主語)	絶対格 (-∅)
dumu+(a)ni+∅	> dumu-ni 彼の息子 (は/を)	所有+絶対格
dumu+(a)ni+e	> dumu-né 彼の息子により	所有+能格 (-e)
dumu+bi+e	> dumu-bé あの息子により	指示+能格
dumu+(e)ne+∅	> dumu-ne 息子たち (は/を)	複数形+絶対格
dumu+dumu+∅	> dumu dumu 息子たち (は/を)	重複+絶対格
dumu tur+ra	> dumu tur-ra 小さな息子に	形容詞+与格 (-ra)
dumu tur+(a)ni+∅	> dumu tur-ra-ni 彼の小さな息子 (は/を)	形容詞+所有 +絶対格
dumu tur+bi+ra	> dumu tur-bi-ra あの小さな息子に	形容詞+指示 +与格
dumu tur+(e)ne+ra	> dumu tur-re-ne-ra 小さな息子たちに	形容詞+複数形 +与格

4 第4課 名詞連鎖

dumu+(a)ni+(e)ne+ra > dumu tur-né-ne-ra 形容詞+複数形
彼の息子たちに +与格

dumu tur-bé-ne-da > dumu tur-bé-ne-da 形容詞+指示
あの小さな息子たちと +複数形
+共格 (-da)

より長い名詞連鎖を分析する場合、連鎖を小さな単位を連結したも
のとして考えることができます。各単位は、次の要素で修飾されると
その要素とともに新しい大きな単位を形成し、その単位はまた次の要
素で修飾されるといった具合です。例えば、上の表の最後の例は次
のように段階的に構築することができます：

{dumu+tur}	小さな息子
{{dumu+tur}+bi}	あの小さな息子
{{{dumu+tur}+bi}+(e)ne}	あの小さな息子たち
{{{{dumu+tur}+bi}+(e)ne}+da}	あの小さな息子たちと

1) 訳注：この表で、絶対格の the son を《息子 (は/を)》と訳しています。能格言
語の絶対格は自動詞の主語と他動詞の目的語に使われ、英語ではどちらも the son
ですが、日本語では「息子は○○する/息子を○○する」と書き分けられるからで
す。また能格の場合に原著では by that son としているところを《息子によって》
と訳しています。さらに his/her son を《彼の息子》と訳しました。「彼」はシュ
メール語と同様に男女を区別しない代名詞とします。

属格構文によって、または関係節やさまざまな ^{apposition} 同格などのより複雑な限定詞で連鎖の形容詞スロットが埋められることで主要部名詞がさらに修飾されると、名詞連鎖の分析は少し難しくなります。このような名詞連鎖の拡張タイプは、後に属格標識および名詞化接尾辞 -a の項で説明します。

名詞連鎖の主要部名詞は、単一の名詞である必要はないことに注意してください。前の課で説明したような名詞複合体、*diġir diġir* 《すべての神々》のような重複によって複数化された名詞、*an ki* 「天(と)地」や *ama ad-da* 《母(と)父》のような二つの異なる名詞を接続詞を伴わずに複合した語、*iri úri^{ki}* 《都市ウル》のような同格であってもよいのです。例えば次の例をみてみましょう。

<i>dubu-sar tur-re-ne</i>	下級の書記
<i>en en-bi</i>	あの領主たちすべて
<i>an ki-a</i>	天と地で
<i>ama ad-da-ni</i>	彼の父母 (は/を)
<i>iri Lagaš^{ki}-a</i>	ラガシュ市にて

バフブリーヒ（所有複合語）修飾

シュメール語の主要部名詞の修飾として非常に一般的なのは、バフブリーヒ属詞です。サンスクリット文法に由来するこの用語は、^{bahuvrīhiattributive}《多くの米（を持つ、または特徴とする）》を意味し、*lugal á dugud*のような並列句を説明します。これは《重たい腕である王》（同格）ではなく、^{paratactic phrase}《重たい腕を持つ王》と訳すべきでしょう。同様に、*é bur sa₇-sa₇* は《美しく形成された多くのブル壺を持つ寺院》、*ùg saġ gīg-ga* は《黒い頭を持つ人々》＝シュメール人となります。

コピュラ終止連鎖

名詞連鎖は、前接コピュラ（シュメール語の二つの「～だ、～である」動詞のうちの一つ）^{encliticcopula}で終わることがあります。この場合、コピュラが最後の格標識の代わりになり、そ連鎖と文の残りの部分との関係は、動詞連鎖によって示されるか、文脈から推測する必要があります。コピュラについては後の課を参照してください。

また、{a-na+šè+(a)m}（《何》＋終止格＋コピュラ）>a-na-šè-àm《何のためですか》＝なぜですかのような短い副詞表現では、特に格標識の後にコピュラが続くことがあります。あるいは{ġá+ak+am}（《私》＋属格＋コピュラ）>ġá-kam《私のです》のような述語的属格構文の場合、ki-siki-bi-ta-me《彼女たちはあの羊毛の（織物の）場所から来た》（HSS 3, 24 6:11 OS）と比較してください。

前置形容詞

形容詞は事実上常に、名詞連鎖内での順序に従って、修飾する名詞の後に続きます。文学テキストに頻出する例外としては、kù^dinana(-k) 《聖なるイナナ》、kù lugal-bàn-da 《聖なるルガルバンダ》(ルガルバンダとアンズー 351/353 行) のように、形容詞 kù(g) 《聖なる》が神や英雄の名前の前に置かれることがあります。kù はここでは、前置された(強調された)形容詞として次の名詞の前に置かれることで《聖なるもの、イナナ》のように表現されています。この詩的形式は、kù-^dDN(-ak) 《(神名の) 銀》という形の属格構文、すなわちアッカド語における *kasap* DN の形の人名とは区別しなければなりません。(マルケージ [24] p.73 n. 384 を参照。)

覚えていて

能格か位置・終始格の接尾辞-eが必要とされるとき、先行する所有代名詞の中に隠れていることがある！

所有代名詞-bi「その、それらの」は、通常、指示詞「これ、あれ」としても機能する！

第5課 代名詞と指示詞

初期のシュメール語のテキストには、いくらかの基本的な代名詞しか記されておらず、特に複数形はほとんど見つかりません。アッカドの書記によって再建された後期の文学的・文法的テキストからより完全なパラダイムを再構築することができますが、その資料の背後にある伝統は確かなものではなく、そこに示された形はしばしば空想的であるか、あるいは疑わしいものです。

シュメール語の代名詞の多くは歴史的に関連していると思われますが、中には明らかに二次的なものもあり、特に一人称と二人称の複数形がそうです（下記の独立代名詞のパラダイムを参照）。このような二次的な形は、アッカド語の完全なパラダイムからの類推analogyによって生み出された可能性があります。中には、シュメール語の限定されたパターンに不満を持ったアッカド語の書記による創作によってパラダイムを埋めたものもあったかもしれません。出典が何であれ、いくつかの代名詞の形はシュメール語が生きた言語でなくなった時代のみ、場合によっては学問的な文法書にのみ見出されます。また、まだ見つからないものや、おそらくまったく存在しなかったものもあります。

この入門を通して詳しく説明したさまざまな代名詞のパラダイムについて、この課の後にある「人称代名詞の形のまとめ」で比較しやすいようにまとめています。理論的に予測されているものの実際にはまだ立証されていない代名詞の要素はクエスチョンマークで示し、この

言語の一般的なパターンによって完全に除外されると思われる要素はダッシュ (-) で示します。

独立代名詞 (§90-99)

以下は標準的な引用形式です：

		ġá-e (古くは ġe ₂₆ -e)	
単数	1	または ġe ₂₆ -e	私こそは/を
	2	za-e (古くは zé)	あなたこそは/を
		e-ne (古くは a-ne)	
	3p ¹⁾	OB ではまれに èn とも	彼こそは/を
複数	1	me-en-dè-en	我々こそは/を
	2	me-en-zé-en	あなたがたこそは/を
	3p	e-ne-ne(古くは a-ne-ne)	彼らこそは/を

名詞と同様に、独立代名詞は名詞連鎖の主要部として現れ、文の残りの部分との関係を示す格後置詞と接合します。「人称代名詞の形のまとめ」では、代名詞が音韻上および正書法上、どのように格後置詞と組み合わされるかを示しています。なお、これらの代名詞の後期形には、指示(または能格?)接尾辞-eが歴史的に付加されているようです。この-eの要素は、おそらく元来は決定する、あるいは話題化する機能を持っていたのでしょう。グデア碑文に見られる二人称単数形 zé を考慮すると、少なくとも初期の時代には、一人称単数形の引用形式は実際には ġe₂₆-e (グデアでは単に ġe₂₆) と読まれる

1) 訳注: 3p は三人称の人称 (personal) 代名詞で、人間や神を指す代名詞です。非人称の場合は 3i(impersonal) と表記します。

可能性があります。あるいは、この二つの形は/ǵae/が/ǵe:/、/zae/が/ze:/のように歴史的な省略形なのかもしれません。三人称の a-ne と a-ne-ne はグデア碑文およびそれ以前に見られます。また一人称と二人称の複数形は、前接コピュラ (-me-en-dè-en 《私たちは～だ》、-me-en-zé-en 《あなた方は～だ》) の独立形にすぎません。

動詞複合体の接辞は、ほとんどの必要な代名詞を表現することができるため、独立代名詞は一般的に、強調や明瞭化のためにのみ使用されます。主な例外は名詞文での使用で、特に述語的属格構文では属格とコピュラー動詞 “～だ、である” と組み合わせられ、nīg-bi ǵá a-kam 《それは私のだ》のようになります。これは次の課で説明します。

ちなみに、学生の教材でよく使われるグデアの円筒碑文に見られる間投詞 ga-na 《上がれ！来い！》は、一人称単数の独立代名詞とも動詞 ǵen 《来る》とも関係ありません。

所有接尾辞 (§101-110)

所有代名詞の形

「人称代名詞の形のまとめ」では、所有接尾辞がどのように次の格標識と組み合わせられるかを説明しています（ほとんどの複数形は仮定形であることに注意してください）。トムセン §105-106 も参照のこと。これらの要素に関するトムセンの記述に、以下の注釈と別の説明を加えます：

所有接尾辞を学習する際の主な課題は、それらが後続の要素とどのように結合するかを認識することです。特に単数形です。シュメー

12 第5課 代名詞と指示詞

ル語が生きた言語だった時代の記録では、複数形はほぼ見つからないからです。名詞連鎖の順序で所有代名詞に続くことができる要素は人称複数形標識 $-(e)ne$ 、格標識、前接コピュラだけだということをお出ししてください。所有代名詞に絶対格標識、能格標識、および位格標識を付加した場合のパラダイムを比較してみましょう：

	絶対格 (-Ø)	能格 (-e) 位置・終止格 (-e)	位格 (-a)
単数			
1	$-\hat{g}u_{10}$ 私の～は/を	$-\hat{g}u_{10}$ 私の～により	$-\hat{g}á$ 私の～に
2	$-zu$ あなたの～は/を	$-zu$ あなたの～により	$-za$ あなたの～に
3(人称)	$-(a)ni$ 彼の～は/を	$-(a)né$ 彼の～により	$-(a)na$ 彼の～に
3(非人称)	$-bi$ その～は/を	$-bé$ その～により	$-ba$ その～に
複数			
1	$-me$ 我々の～は/を	$-me$ 我々の～により	$-me-a$ 我々の～に\
2	$-zu-ne-ne$ あなた方の～は/を	$-zu-ne-ne$ あなた方の～により	$-zu-ne-ne-a$ あなた方の～に
3(非人称)	$-(a)ne-ne$ 彼らの～は/を	$-(a)ne-ne$ 彼らの～により	$-(a)ne-ne-a$ 彼らの～に

最初の列は、所有代名詞の標準的な引用形式です。絶対格代名詞、つまり主格または対格の場合の標識は、ゼロ形態素（つまり表立った接尾辞がなく、慣例的に記号 \emptyset で表されるもの）です。

能格と位置・終止格の両方の格標識が -e であることに注意してください。なお実際の正書法では、所有代名詞の後に -e が明確な形で現れることはほとんどありません。例外もあり、たとえばグデア（紀元前 2120 年頃）の王碑文には -(a)-ni-e と記されていますが、これはおそらく -(a)-né-e が音訳されたものでしょう。ウル 3 世のシュルギ讃歌（原文は紀元前 2075 年頃）では、-ġu₁₀-u₈ < -ġu₁₀-e が見られます（/ġue/ > /ġuu/ 発音は [ġu:]）しかし全体として、通常、-e が後につく所有代名詞とつかない所有代名詞とを区別することはできず、したがって、末尾に所有代名詞だけが現れる名詞連鎖は、統語的には主語／目的語（絶対格）か、能格動作主か、位置・終止格の間接目的語かのいずれかになります。したがって、lugal-ġu₁₀ という語句は《私の王》{lugal+ġu₁₀+ \emptyset }と《私の王によって》{lugal+ġu₁₀+e}のどちらとも読めます。もし文に必要な能格または位置・終止格の格標識が欠けていると思われるなら、それは所有接尾辞の中に隠されている可能性があるということをお覚えておいてください。

トムセン §107 でこの現象に関連した事柄が論じられています。音節記号価表が示すように、NI と BI の記号は né と bé とも読めます。これは広く行われている慣行ではないのですが、この文法書では所有接尾辞 -ni と -bi の後に推定される格標識 -e がある場合は -né と -bé と翻字します。したがって {lugal+(a)ni+ \emptyset } 《彼の王は（主格）》は lugal-a-ni と翻字し、{lugal+(a)ni+e} 《彼の王によって（能格）》は lugal-a-né と翻字します。三人称単数の能格と位置・終止格での

/i/ 母音の削除については、すぐ下に示す所有代名詞 + 人称複数要素 -(e)ne のパラダイムを比較してください。

位格 locative case は -a という接尾辞で示されます。能格や位置・終止格の -e と同様に、単数所有代名詞の /u/ と /i/ の母音を置き換えますが、複数所有代名詞の /e/ の母音の後では常に明白に現れる点が異なります。つまり位格接尾辞は文脈に関係なく、先行するどんな母音にも脱落しないのです。なお代名詞の接尾辞 -(a)ni と -bi については標準的なパラダイムからの逸脱が生じ得るようです。グデア碑文に見られるパラレルテキスト、彫像 B 8:34-37 と円筒 B 18:1-3 を比べてみましょう。前者で zâ-ba 《その端に》、é-bi-a 《その神殿の中に》と書かれている語が、後者では逆に zâ-bi-a と é-ba と書かれています。これは文体の違いによるものでしょう。

トムセン (§104) は、三人称単数 -(a)ni と その複数形 -(a)ne-ne の最初の母音 /a/ は、母音の前で²⁾削除されると考えています。本書での見解では、むしろ -ni と -ne-ne がこの代名詞の基本形であり、先行する語幹が子音で終わるときに /a/ の母音挿入が発生する、とします。人称複数形標識 -(e)ne における /e/ の同様の用法と比べてみてください。これらの助母音 helping vowel は、OB の擬古シュメール語 classical O B Sumerian では規則的に表記されますが、それ以前の時代では、少なくとも文字では頻繁に省略されます。そのため、サルゴン期以前のテキストやグデアのテキストでは、lugal-ni 《彼の王》や lugal-ne 《王たち》と書かれるところ、後のアッカドの書記は規則を守り、lugal-a-ni や lugal-e-ne と書

2) 訳注：Foxvog の原文では Thomsen (§104) believes that the initial /a/ vowel of the 3rd sg. and pl. forms -(a)ni and -(a)ne-ne is deleted before vowels. とあり、そのように訳しましたが、Thomsen (§104) の原文では The initial vowel [a] of /-ani/ and /-anene/ disappears after a vowel, ですので「母音の後で」が適切と思われます。

いています。話し言葉の慣習との接点を失った後代の書記は、助母音を接尾辞の必須部分とみなすようになり、 $l\acute{u}-ne < l\acute{u}+(e)ne$ 《男性、人》の代わりに $l\acute{u}-\ddot{u}-ne$ のように不要なところに助母音を書くことさえあります。初期の、明らかに「欠陥のある」文章を校正する誘惑に負けて、例えば $lugala-ni$ 、 $lugal(a)-ni$ 、 $lugal-(e)ne$ のように、 $/a/$ や $/e/$ を実際のテキストの翻字に挿入してはなりません。シュメール人はおそらく助母音を発音したのかもしれませんが、彼らはそれを統一して書く必要を感じませんでしたし、私たちもそうする必要はありません。 $lugal-ni$ 、 $lugal-ne$ と翻字しましょう。

文章読解では、所有代名詞連鎖 $-zu-ne$ や、二人称複数形のパラダイムにおける所有接尾辞 $-zu-ne-ne$ に出会うことがあります。別の概念を表す両者を混同しないようにしてください。 $-zu-ne-ne$ は正しく所有代名詞で、通常、単数形の主要部名詞とともに現れます。例えば $\{dumu+zunene\} > dumu-zu-ne-ne$ 《あなたたちの息子》です。一方 $-zu-ne$ は二人称単数の $-zu$ 接尾辞に人称複数要素 $-(e)ne$ を加えたもので、複数形の人称名詞を表します。例えば、 $\{dumu+zu+(e)ne\} > dumu-zu-ne$ 《あなたの息子たち》です。

名詞連鎖の順序では、所有接尾辞と後続の格標識の間に人称複数標識を挿入できます。複数形標識 $-(e)ne$ は、単数形の所有格と次のように結合します。(複数形の接尾辞 $+(e)ne$ は、私の知る限り、通常の代名詞の奇妙な異綴表記 $-ne-ne-ne$ のいくつかを除けば、未立証です。)

	単数		複数
1	lugal-ġu ₁₀ 私の王		lugal-ġu ₁₀ -ne 私の王たち
2	lugal-zu あなたの王		lugal-zu-ne あなたの王たち
3p	lugal-a-ni 彼の王		lugal-a-né-ne 彼の王たち
3i	lugal-bi それの王		lugal-bé-ne それの王たち

複数形記号 $-(e)ne$ の挿入母音 $/e/$ は、一人称と二人称の $/u/$ の後には現れません。逆に、三人称単数の人称 $-(a)ni$ と非人称 $-bi$ では $/i/$ の母音が削除され、結果として生じる子音 $/n/$ と $/b/$ の後に $/e/$ が現れます。上記の所有代名詞+能格のパラダイムでも同様の現象が見られます。(a)ni または $-bi$ の後に属格 $(-ak)$ または位格 $(-a)$ の後置詞が続く場合にも、同じように $/i/$ が削除されます ($-(a)na$ または $-ba$ となります。次の課を参照)。このような削除パターンはこの文法書全体に通ずる筆者の見解をよく示しています。すなわちシュメール語では文法情報の大部分は主に子音要素によって伝達され、多くの文脈での母音は主に子音要素を開始または分離することで発音可能にする、(歴史的に言えば) 語頭音添加的または語中音添加的な役割にすぎないのです。

所有代名詞の用法

文字どおりの所有の意味に加えて、これらの代名詞は所有者と所有される物の間のより一般的な参照関係を示すこともできます。

(1) 主語の属格関係を示す：

ki-áġ-ġá-ni-me-en

あなたは (-me-en) 彼女の最愛の人 (=彼女に愛されている人) です。

エンメルカルとエンシュギラナ 277 OB

(2) 目的語の属格関係を示す：

a-ba-a gâ-gin₇ búr-búr-bi mu-zu

私と同じように、誰がその啓示を知るだろうか？

シュルギ C 111 UrIII

á-tuku hul-gâl érim-du-bé-ne tu₁₀-tu₁₀-bi kè(AK)-dè

その強大な、悪を行う、不道德な者たち、彼らの打倒のために。

Civil, JCS 21, 29 1:46-48 Ur III

(3) 間接目的語関係の種類を示す

nam-ti-il níg-gig-ga-ni hé-a

人生が彼の痛手 (=彼を傷つけるもの) となりますように！

ウルナンマ 28 2:13-14 Ur III

^den-líl-le sipa ^dur-^dnamma-ra ki-bala érim-gâl-la-né si

mu-na-an-sá

エンリルはウルナンマのために彼の敵対者 (=彼を敵視する彼ら) の土地を平定する。

ウルナンマ B 14 Ur III

inim é-gal-kam inim-g̃ar-bi nu-mu-tùm

宮殿の命令だ。彼は不平（＝{それについての不満）を持ち出してはならない！

Sollberger, TCS 1, 130:10-11 Ur III

tukum-bi Ur-àm-ma sipa nam-érim-bi ù-un-ku₅ dub-bi zi-re-dam
もし羊飼いのウランマがこのことについて誓ったなら、その石版（このことに関するもの）は取り消される。

Fish, Cat 533:7-10 Ur III

nin₉ bân-da-g̃u₁₀-gin₇ ír-g̃u₁₀ hé-še₈-še₈ 私の妹のように、私の涙（＝私に関する涙）を流すことができますように！

ドゥムジの夢 14 OB

arhuš-g̃u₁₀ igi-ni-šè hu-mu-ra-ab-bé

あなたが彼の前で私の慈悲（＝私のための慈悲）を言ってくださいますように！

Hallo, AOAT 25, 218:36 Larsa letter

g̃á-e ús-sa-zu-me-en

私はあなたのフォロワー（＝あなたの後に続く者）です

エンメルカルとエンシュギラナ 278 OB

é-gal-la-na níḡ-gu₇ la-ba-na-g̃ál tuš-ù-bi nu-ub-du₇

{tuš+e+bi+Ø}

彼の宮殿には、彼が食べるものは何もなかった、その住まい（＝その中に住むこと）は、そこにはふさわしくなかった

シュメールとウルへの哀歌 307

(4) より関連の薄い関係を示すこともある

a-ġu₁₀ šà-ga šu ba-ni-du₁₁

あなたは私の種（私を生むための種）を胎内に置かれた

グデア円筒碑文 A 3:8 Ur III

alaġ-na-ni mu-tu nam-šita-e ba-gub

彼は彼の石像（彼自身の像）を作り、祈り手のために設置した。

グデアの像 M 2:7-3:2 Ur III

iri-na ú-si₁₉-ni zâ-bi-a mu-da-a-nû

{mu+n+da+n+nû}

その町では、彼の汚れた者たち（彼に対して汚れた者たち）を、その端に、彼から遠ざけるように横たわらせた。

グデア円筒碑文 B 18:1

giš^{ti} tir-zu mes kur-ra hé-em

giš^{gu} za-bé é-gal lugal-la-ke₄ [me]-te hé-em-mi-ib-ġál

あなたの森が山のメスの木 (mes-trees) でありますように！
 王の宮殿のためにふさわしいそれらの椅子(それらでつくられたもの)
 ができますように！

エンキと世界秩序 221f OB

eger-ra ba-úš-zu ga-na-ab-du₁₁ ér-zu hé-še₈-še₈

(もし)その後、私が彼女にあなたの”彼が死んだ”ことを話したら、
 彼女はあなたのことで涙を流すだろう。

ギルガメシュとフワワ A 99 (106)

指示詞の要素 (§133-138)

-bi あの、この

-bi は三人称の非人称所有接尾辞と、最も一般的な指示詞の両方の機能があります。文脈によって「その、それらの、その、この、あれらの」と訳すことができます。本来は遠称far-deixis、「あれ」を指していますが、その指示力demonstrative forceはより概括的なものであることが多く、文脈によっては冠詞の「the」と比較されることもあります(シュタインケラー [30] p. 34 n. 59, p. 93 n. 271)。

-ne これ

-ne は近称、「これ」を表します。-ne はあまり見ることはありません。人称複数形の接尾辞-(e)ne と混同しないようにしてください。この指示詞は形容詞としても、例えば u₄-ne-a 《この日に》(エンキとニンフルサング 50)としても、また独立代名詞 ne-en としても現れます。独立代名詞の例は u₄ ne-en 《嵐、これ》(ウル滅亡哀歌 137)、

あるいは *ne-e*、または単なる *ne* です。コピュラ *ne-me(š)* 《それらはそれらである》 ([30] No45:10 UrIII) や *nīg ne-e* 《このこと (を行ったのは誰か)》 (ウルナンマ讃歌 A 154) と比較してください。起源の可能性としては、*ne-e = nīg-e =* アッカド語の *an-[nu-ú]* 《これ》 (Emesal Vocabulary III 157 MSL IV 42) において *ne-e* が「このこと」を意味する語のエメサル発音であること、またウルナンマ法典 349 で通常の *nīg-dé-a* 《結婚の贈り物》に対する *ne-dé-a* の表記や、あるいは *nesağ* に対する音節表記の *ne-sağ* や *nīg-sağ* もあります。

-ri あの

-ri は「あの人、あちら、あのころ」のように空間や時間における遠隔性を示します。後の等価語である *nesû* 《引っ込む、後退する》も参照のこと。常套句で見る以外に語彙として使われることはまれです。*u₄-ri-a* 《あの遠い日に、昔々》のように、*-ri* は名詞連鎖の形容詞の位置を占めます。この *-ri* と同音の接尾辞である孤立後置詞 *-ri* との関係は不明です (グリーン [17] p.145 参照)。

-e これ、それ

-e は、近称であると同時に「これ (については)」のような決定力を持つようです。対になる *-ri* と同様、形容詞として機能します。特に名詞 *gú* 《川岸》を使った言い回しで *gú-ri-ta ... gú-e-ta* 《向こう側から、あそこに... こっち側から、こっちに》 (エンリルとスト 70 OB) というものがあります。

-še その近くの

-še は、主に語彙資料から知られる珍しい接尾辞です。意味は

《聞き手の近くに》でしょうか。[8]。最も有名な一節は、ギルガメシュとアツガ 89-91 のものでしょう。^dgilgameš bād-da gú-na im-ma-an-lá, igi bar-re-da-ni ag-ga igi ba-ni-in-du₈, árad lú-še lugal-zu-ù 《ギルガメシュは壁から身を乗り出した。彼が観察していると、アツガは彼を見て（言った）。奴隸よ、お前の向こうにいるあの男はお前の王か？》

ur₅ これ

独立非人称代名詞で、特に ur₅-gin₇ 《このように、こうして》や ur₅-šê(-àm) 《(それは) こうだから》などのフレーズで使われます。

疑問代名詞 (§111-127)

基本的な疑問代名詞は、a-ba 《誰（人称）》、a-n 《何（非人称）》、me-a 《どこ》の三つです。これらの代名詞は格標識やコピュラとともにさまざまな疑問表現を形成します。最も一般的な表現としては次のものがあります。（-am は三人称の前接コピュラ《彼は／それは》です。）

a-ba-àm	それは誰?	= 誰?
a-na-aš/šè(-àm)	(それは) 何のため?	= なぜ?
a-na-àm	それは何?	= なぜ?
a-na-gin ₇ (-nam)	(それは) 何のよう?	= どのような?
me-a	どこで?	= どこ?
me-šè	どこに向かって?	= どこへ?
me-ta	どこから?	= どこから?
(参考)en-na-me-šè, en-šè	～まで?	= どれだけ長く?

再帰表現 (§129-132)

ní 《自身》は、複合動詞 ní-te(n) 《自身を冷やす、リラックスする》のように自立名詞として、または ní-zu 《あなた自身》のように所有接尾辞によって修飾されることで出現します。所有格の接尾辞や dimensional case 空間格の後置詞と組み合わされて、次のような副詞的表現になることもよくあります。

ní-ba	自身に、自身で、自身の上に
ní-bi-ta	自身によって、
ní-bi-šè	自身のために、自身により

属格-ak とともに使用された場合、 {é ní+ġu₁₀+ak+a} > é ní-ġá-ka 《私自身の^{-ak}家^{-a}で》のように《～自身の》と訳すことができます。

ní-te (me-te とも) 《自分に近づく》という名詞句を基にした関連

表現があり、次のような三人称表現で使われます。

ní-te-ni	彼自身を/が	{ní-te+(a)ni+∅}
ní-te-né	彼自身により	{ní-te+(a)ni+e}
ní-te-ne-ne	彼ら自身により	{ní-te+(a)nene+e}
ní-te-na	彼自身の	{ní-te+(a)ni+ak+∅}
ní-te-a-ni-ta	彼自身の意思により	{ní-te+(a)ni+ta}

不定形容詞 (§128)

不定形容詞 na-me 《ある》は中性語^{neutral term}として機能し、それが現れる動詞の形が肯定的か否定的かによって、肯定的に訳されることも否定的に訳されることもあります。例えば lugal na-me nu-um-gên 《ある王は来なかった=王は誰も来なかった》のようになります。主に lú 《人》、níg 《物》、ki 《場所》または u₄ 《日、時間》を修飾します。

lú na-me	ある人が、どの人も、誰も
níg na-me	あるものが、どれも、なにも
ki na-me	あるところ、どこも
u ₄ na-me	あるとき、いまだかつて

<lú> na-me のように省略形で使われることも多いため、不定代名詞とも呼ばれます。他の形容詞と同様、ハイフンで先行する名詞と連結して翻字されることもあれば、独立した単語として書かれることもあります。また他の形容詞と同様に、格標識で終わる名詞連鎖の中に現れることが多いです。例えば、ki na-me-šê 《ある場所に/どの場

所にも》(TCS 1, 77:5 Ur III)、*é-a še na-me nu-ġál* 《家には大麦がない》(MVN 11, 168:13 Ur III)。

関係代名詞

次の名詞または疑問代名詞は、後の関係節および名詞化小辞-a に関する課で議論される文脈では仮想的な関係代名詞として機能します。

<i>lú</i>	この人物	the person (who)
<i>níġ</i>	この物	the thing (which)
<i>ki</i>	この場所	the place (where)
<i>a-ba</i>	誰	(the one) who
<i>a-na</i>	どれ	(that) which

これらの用語は正しくは関係代名詞ではなく主要部名詞であるともいわれています。唐橋文^[19]を参照してください。

人称代名詞の形のまとめ

独立代名詞 (§91)

	絶対格・能格 (Ø/e)	与格 (ra/r)	空間格 ³⁾ (da/ta/šè)
1	ĝá-e (ĝe ₂₆ -e)	ĝá-(a)-ra/ar*	ĝá-(a)-da*
2	za-e (古くは zé)	za-(a)-ra/ar*	za-(a)-da*
3p	e-ne (古くは a-ne)	e-ne-ra/er	e-ne-da
1	me-en-dè-en	—	—
2	me-en-zé-en	—	—
3	e-ne-ne(古くは a-ne-ne)	e-ne-ne-ra/er	e-ne-ne-da

*一人称と二人称の単数代名詞と格標識の間には-e-または同化した-a-母音が現れることがあります。

3) 訳注：原文では Dimensional。共格 (ra) と奪格 (ta) と終止格 (šè) をまとめて、方向を示す格ということで Dimensional としているか。適当な訳語がわからなかったので空間格としています。

所有代名詞 (§101-110)

	能格 (e)		
	絶対格 (Ø)	位置・終止格 (e)	与格 (ra)
1	-ĝu ₁₀	-ĝu ₁₀	-ĝu ₁₀ -ra/ur
2	-zu	-zu	-zu-ra/ur
3p	-(a)-ni	-(a)-né	-(a)-ni-ra/ir
3i	-bi	-bé	-bi-ra/ir
1	-me	-me	-me-ra/(er?)
2	-zu-ne-ne	-zu-ne-ne	-zu-ne-ne-ra/er
3p	-(a)-ne-ne	-(a)-ne-ne	-(a)-ne-ne-ra/er
	終止格 (šè)	属格 (ak)	位格 (a)
1	-ĝu ₁₀ -šè/uš	-ĝá	ĝá
2	-zu-šè/uš	-za	-za
3p	-(a)-ni-šè/iš	-(a)-na	-(a)-na
3i	-bi-šè/iš	-ba	-ba
1	-me-šè	-me	-me-a
2	-zu-ne-ne-šè	-zu-ne-ne	-zu-ne-ne-a
3p	-(a)-ne-ne-šè	-(a)-ne-ne	-(a)-ne-ne-a

	空間格 (da/ta/šè)	複数形 ((e)ne)
1	-ĝu ₁₀ -da -ĝu ₁₀ -ne	
2	-zu-da	zu-ne
3p	(a)-ni-da	(a)-né-ne
3i	bi-da	bé-ne
1	-me-da	?
2	-zu-ne-ne-da	?
3p	-(a)-ne-ne-da	?

複数形の形のいくらかは、OB 以降の文法テキストでのみ再建または立証されています。

覚えていて

属格構文 = 制辞 + 披制辞 + AK !

属格の /a/ は削除される可能性があるが、属格の -a は決して削除されない !

先行属格はシュメール語の最も一般的で、最も見落とされがちな構文パターンのひとつである !

第 6 課 名詞修飾格: 属格と様格

シュメール語の 10 個の格標識接尾辞は、英語の前置詞と同じような役割を持ちますが、名詞の前ではなく後に現れるため、慣例的に後置詞と呼ばれています。格後置詞は、おおまかに 2 つに分類されます。

属格と様格は、一つの名詞（または代名詞）と別の名詞との関係を示すもので、名詞修飾的な機能をもっていると言えます。残りの格は副詞的な機能を持ち、主に名詞連鎖と動詞の関係を示します。

属格と様格が示すのは名詞の関係だけですので、名詞の後置詞だけで表示されます。一方、動詞の主語、動作主、目的語に付されて位置や方向の概念を表す副詞格は、多くの場合で名詞後置詞だけでなく動詞形の対応する接辞（能格接頭辞、空間的接頭辞、主語/被動者接辞）でも表示されます。ある文や節に副詞の後置詞とそれに対応する動詞の接辞を伴う句がある場合、動詞の接辞は文の名詞の部分で述べられた情報を動詞の複合体の中で繰り返す、または再述しているともいえます。

属格 (§161-168)

属格の構造

属格後置詞genitive postpositionは、二つの名詞を連結して属格構文を形成し、他の名詞と同様に通常pluralmodifierの形容詞、代名詞、複数修飾語を含んで最後に格標識で終わる拡張された名詞連鎖を形成します。従って、ある意味では属格の後置詞は常に他の格標識と共に起していると言えます。このような特徴は他の格標識にはなく。異なる種類の構文要素ともいえますが、慣例的に格標識の一種とされています。

属格構文は通常、次のような三つの要素で構成されます。

1. “nomen regens” 《支配/統治する名詞 (制辞)》
2. “nomen rectum” 《支配/統治される名詞 (被制辞)》
3. 属格後置詞 -ak 《の》

制辞regensと被制辞rectumはそれぞれ形容詞や限定符、所有代名詞や指示代名詞、複数形標識によって修飾されることがありますが、要素の順序には一定の制限があります。名詞連鎖の順序の議論に戻るならば、単一の属格構文からなる拡大名詞連鎖の基本構造は以下のように表せます (Thomsen §46 参照)

制辞	被制辞	属格	被制辞の修飾語	格
名詞 + 形容詞	名詞 + 形容詞 + 所有/指示 + 複数 + ak		所有/指示 + 複数	格

(属格標識を伴う) 被制辞は、制辞の第二の形容詞の修飾語の一種と

adjectivalmodifier

考えることができ、第一の形容詞要素と、それに続く所有代名詞や指示代名詞、人称複数形接辞の間に位置します。以下の例文についてその構造と音韻・正書法の形を調べてみてください（属格末尾の /k/ の削除については後述します）。

{é} + {lugal+ak} + ∅ > é lugal-la 王の家を

{é} + {lugal+ak} + a > é lugal-la-ka 王の家^aで

{dumu} + {lugal+ani+ak} + e >
dumu lugal-a-na-ke₄ 彼の王の息子^eによって

{šeš tur} + {lugal mah+ak} + ene + ∅ >
šeš tur lugal mah-a-ke₄-ne 高貴な王の弟^eが/を

{šeš tur} + {lugal mah+zu+ak} + bi + ene + ∅ >
šeš tur lugal mah-za-bé-ne あなたの高貴な王の弟^eたちが/を

複数属格構文 Multiple Genitive Constructions

シュメール語の名詞連鎖には、二つ目の属格構文が、また時には-ak 無しでさらにもう一つが埋め込まれることがあります。このような場合、ある属格構文が別の属格構文の被制辞となり、属格後置詞が連鎖の末尾に追加されます。

- 制辞 + {制辞 + 被制辞 + ak} + ak
- 制辞 + {制辞 + {制辞 + 被制辞 + ak} + ak + (ak)}

例

é dumu+ak+∅ > é dumu 息子の家を

é dumu lugal+ak+ak+∅ > é dumu lugal-la-ka 王の息子の家を

é dumu lugal úri(m)^{ki}+ak+ak+ak+∅ > é dumu lugal úri^{ki}-ma-ka ウルの王の息子の家を

二重または三重の属格構文を持つ連鎖は、その構成要素が広範囲に修飾されると非常に複雑な構造にもなりえますが、実際にはこのような形式では、形容詞や代名詞の修飾は最小限に留まる傾向にあります。このような修飾が必要な場合は、長い連鎖を管理しやすい分節に分割するために、anticipatory genitive 先行属格構文（後述）を使用することができます。

属格後置詞の形

属格後置詞の完全な形は /ak/ です。しかし、その前後にある要素によって、特殊な音韻規則が適用されます。すなわち、音韻環境に応じて四つの音韻実現を持つ morphophoneme 形態音素 /AK/ として記述することができます。音韻環境は前後の音が母音 (V)、子音 (C)、または子音と

同様に音素配列的に機能するゼロ形態素 (すなわち phonotactically 語境界 #) のどれであるかで区別されます。それぞれの発音は以下のとおりです。

/ak/

C_V 環境 é lugal+ak+a > é lugal-a-ka

王の家^{-a}で

/k/

V_V 環境 é dumu+ak+a > é dumu-ka

息子の家^{-a}で

/a/

C_C 環境 é lugal+ak+šè > é lugal-a-šè

王の家^{-šè}へ

C_#環境 é lugal+ak+∅ > é lugal-a

王の家を

/∅/

V_C 環境 é dumu+ak+šè > é dumu-šè

息子の家^{-šè}へ

V_#環境 é dumu+ak+∅ > é dumu

息子の家を

ざっくりいえば、子音が先行する場合は/a/が保持され、母音が後続する場合は/k/が保持されるということになります。

上記のスキームにはいくつかの例外があります。第一に、V_#環境ではごくまれに/Ø/ではなく/a/が不意に現れることがあります。例えば、上の例で言えば é dumu ではなく é dumu-a と書かれることがありました。第二に、古バビロニア時代以前の正書法では/k/の存在は属格の十分なしるしと考えられていたようで、/a/が実際に発音されていたとしても é lugal-la-ka ではなく é lugal-ka と書かれることがしばしばありました。より古いテキストでは、名詞の末尾音でさえ省かれることがあります。例えば、 $\dot{u}nu\text{-}da\text{-}kam$ < $\dot{u}nu(d)+ak+am$ _{auslaut} > ではなく $\dot{u}nu\text{-}kam$ 《牛追い人のです》のように。表語文字を主体とするこの表記体系の初期段階ではしばしば最も重要な要素のみが綴られ、残りはネイティブスピーカーである読み手に委ねられていたのです。

属格が所有代名詞の後に直接続く場合、単数代名詞では母音/u/と/i/は現れず、-ak は子音に続く場合と同じように振る舞います。しかし複数代名詞の最後の /e/ に続く場合は、-ak は予期通りに振る舞

います。

単数形	1	-ġu ₁₀ +ak+∅	>	-ġá	私の～の
	2	-zu+ak+∅	>	-za	あなたの～の
	3p	-(a)ni+ak+∅	>	-(a)-na	彼の～の
	3i	-bi+ak+∅	>	-ba	その～の
複数形	1	-me+ak+∅	>	-me	私たちの～の
	2	-zunene+ak+∅	>	-zu-ne-ne	あなたたちの～の
	3p	-(a)nene+ak+∅	>	-(a)-ne-ne	彼らの～の

例

ká iri+ġu₁₀+ak+∅ > ká iri-ġá 私の街の門を

ká iri+ġu₁₀+ak+šè > ká iri-ġá-šè 私の街の門へ^{-šè}

é mah lugal+(a)nene+ak+∅ > é mah lugal-la-ne-ne 彼らの王
の高貴な家を

é mah lugal+(a)nene+ak+a > é mah lugal-la-ne-ne-ka 彼らの
王の高貴な家^{-a}で

所有代名詞-bi 《その／それらの》と指示接尾辞-bi 《その》は同
じ要素で、同じ音韻規則に従うことに注意してください。従って

{ká(n) tūr+bi+ak} > ká tūr-ba は《その畜舎の門》とも《その畜舎の門》と訳すことができます。

属格と位格の比較

所有代名詞に位格の後置詞 -a が付くと、単数代名詞の /u/ と /i/ の母音が再び削除されるため、属格の /k/ を出現させる他の母音接尾辞が続かない場合は、属格とほとんど同じ形になります。しかし、この二つのパラダイムは複数形では異なり、属格の /a/ が常に削除されるのに対して、位置格の -a は常に出現します。次の所有代名詞+位格のパラダイムと、前の所有代名詞+属格のパラダイムを比べてみましょう。

	1	-ġu ₁₀ +a	>	-ġá	私の～で
単数形	2	-zu+a	>	-za	あなたの～で
	3p	-ani+a	>	-(a)-na	彼の～で
	3i	-bi+a	>	-ba	その～で、それら(集合名詞)の～で
	1	-me+a	>	-me-a	私たちの～で
複数形	2	-zunene+a	>	-zu-ne-n-a	あなたたちの～で
	3p	-(a)nene+a	>	-(a)-ne-ne-a	彼らの～で

したがって、名詞連鎖 é-za は《あなたの家の》{é+zu+ak}または《あなたの家の中で》{é+zu+a}のいずれかを表すことができ、どちらの意味が適切であるかは文脈によって判断しなければなりません。属格と位格の両方を伴うより完全な形、é lugal-za-ka 《あなたの王の家で》 < {é lugal+zu+ak+a} を比較すると、位格標識の母音によって属格の /k/ が発音されていることがわかります。一方、é lugal-za-šè のような連鎖は、終止格標識 -šè 《へ》で終わります。

ここでも-za-は、最後の/k/が見えなくても、代名詞+属格と分析しなくてはなりません。別の格標識が続くことができるのは属格だけですので、位格ではありません。したがって、この場合は《あなたの王の家へ》{é lugal+zu+ak+šè}と分析されます。

イレギュラーな属格のパターン

制辞 + 被制辞 + AK のパターンに合致しない属格のパターンについて、特筆すべきものを挙げていきます。

1) 先行属格 (§164)

anticipatory genitive

被制辞が制辞に先行し、制辞には被制辞に対応する所有接尾辞が示されます。

lugal+ak diġir+(a)ni+∅ > lugal-la diġir-ra-ni 王の、彼の神が/を = 王の神が

udu+ak lugal+bi+∅ > udu lugal-bi 羊の、その主が/を = 羊の主が/を

2) 制辞なき属格 (§167)

úri(m)^{ki}+ak > úri^{ki}-ma 《ウル of、ウル人》は<dumu> úri^{ki}-ma 《ウル of の息子=ウル市民》または<lú> úri^{ki}-ma 《ウル of の男》から単純に制辞が削除されたものと理解されます。例えば古シュメール語の DP 119 4:6 では、個人名を列挙したあとで、Géme^{-ak}Ba-ú-ka-me 「これらはゲメ・バウ of の(人)である」と要約されていますが、多くの並行テキストには、ここに期待される lú が書かれています。このような省略

形の属格構文は、上記のような住民名（民族的起源や国民的アイデンティティを指す用語）、職業名、および名詞化接尾辞 ^{gentilics} -a と関係節の構文（あとの課で説明します）に関連してよく見られます。

3) 述語的属格 predicative genitive

名詞文や名詞節の述語を生成するために、制辞のない属格がコンピュータとともに使用されます。（名詞文とは、「シュルギは王である」、「王は私である」、「王は偉大である」のように、主語を名詞、代名詞、形容詞などの述語と対応させる「X = Y」の文のことです）。この構文は特に独立代名詞でよく使われますが、é-bi šeš-gal-a-kam 《あの家は兄のだ》のように、名詞とともに使うこともできます。次に示す独立代名詞のパラダイムでは三人称のコピュラ /am/ 「それは～だ」を特徴としています。なお一人称単数形と二人称単数形では、-a-母音が余分に書かれることがよくあります。

	1	ġá+ak+am	>	ġá-(a)-kam	それは私のものだ
単数形	2	za+ak+am	>	za-(a)-kam	それはあなたのものだ
	3p	ene+ak+am	>	e-ne-kam	それは彼のものだ
	1	-			
複数形	2	-			
	3p	enene+ak+am	>	e-ne-ne-kam	それは彼らのものだ

このような構文では、主語が繰り返される冗長性を避けるために、統語的規則によってその制辞が削除されると考えられます。

kù-bi <kù> ġá-a-kam

その銀は私の<銀>だ=その銀は私のものだ。

lú-ne <lú> iri-ba-kam

この男はあの都市の<男>だ=この男はあの都市のものだ。

4) 暗黙の動作主としての属格 (§166)

属格は、古い形容語句の形の文脈で使われる場合、動作主を表すことがあります。
e p i t h e t a g e n t

dumu tu(d)+a an+ak+∅ > dumu tu-da an-na

アンのの(によって) 産んだ子。

実際のテキストでの例

maš apin-lá è-a PN engar-kam {engar+ak+am}

それらは農夫<人名>の(によって) 連れられた小作税の山羊だ。

(Nik I 183 1:3-5 OS)

udu gu₇-a PN kurušda-kam {{kurušda+ak+am}}

それらは畜産業者<人名>の(によって) 与えられた羊だ。

(Nik I 148 5:2-4 OS)

gù-dé-a lú é dù-a-ke₄ {{dù+a+ak+e}}

グデアによって、その男の(によって) 建てた家。

(Gudea Cyl A 20:24 Ur III)

属格によって動作主が暗示されるこの古い分詞構文は、能格後置詞 -e によって動作主が明示されるより一般的なパターンとともに王家

の碑文にしばしば見られます。より生産的productiveな後者のパターンは、関係節の解説であらためて言及することになりますが、その構文にそう古代の王の名前にちなんで、メスアンネパダ構文と呼ばれています。

mes an+e pà(d)+a > mes an-né pà-da アンに選ばれし若者

最後に注意

初学者は、ほとんどの固有名詞は実際には短いフレーズであること、そして多くの一般的な神名や王名は属格構文であるものの、通常の引用形からはそれが必ずしも明らかではないことに留意してください。例を示します。

^d nin-ġír-su < ^d nin ġír-su+ak	ギルス市の女王
^d nin-hur-saġ < ^d nin hur-saġ+ak	山の女王
^d nin-sún < ^d nin sún-ak	野牛の女王
^d inana < ^d nin an+ak	天の女王
^d dumu-zi-abzu < ^d dumu-zi abzu+ak	アブズの良き子
ur ^d namma < ur ^d namma+ak	ナンム女神の『犬』

このような属格に基づく名前の後に母音の文法標識が続くと属格の /k/ が再び現れるため、慣れないうちは混乱してしまいがちです。

^d nin ġír-su+ak+e > ^d nin-ġír-su-ke ₄	ニンギルス Ningirsu(-k)により
ur ^d namma+ak+ak+e > dumu ur ^d namma+ka+ke ₄	ウルナンマ Ur-Namma(-k)の息子により
a-šà ^d nin+sún+ak+ak(+ak) > a-šà ^d nin-sún-na-ka+ke ₄	

ニンスン Ninsuna(-k) の土地の

同様の混乱は、/k/ の語末音を持つ、つまり語幹が脱落しやすい子音 ^{amissibleconsonant} /k/ で終わる名詞に初めて遭遇した場合にも経験するでしょう。属格標識での場合と同様、母音が後に続かない場合にこの /k/ が規則的に削除されるのです。

énsi(k)+∅ > ensí 領主が

dumu énsi(k)+ak+e > dumu énsi-ka-ke₄

領主の息子により

ka(k)+a/ak > ka-ka 口^{-ak}の または 口^{-a}で

2 番目のフレーズでは、二つの /k/ 音があることから、一見すると属格が二つあるようにも見えますがそれは誤った分析です。このフレーズ中に完全な属格構文 (制辞 + 被制辞 + ak) は 1 つしか説明できないからです。また最後の語 (ka-ka) は名詞の重複と解釈することもできます。

様格 (§214ff.)

属格と同じように、^{equative case} 様格 は名詞または代名詞間の関係を表します。名詞の後置詞によってのみ示され、動詞連鎖の中に対応する接中辞^{infix}が現れることはありません。基本的には「～のような、～のように」を意味しますが、従属関係節 (後の課で説明) では、「ちょうどその時」、「同じころに」、「まもなく」、「その間」などの時間的な副詞の意味を持つこともあります。また、ur₅-gin₇ 《このように、こうして》、húl-la-gin₇ 《喜んで》、a-na-gin₇ 《何のように、どのように》など、さまざまな一般的な副詞表現にも見られます。

様格は GIM という記号で表記されることが多く、伝統的には単に-gim と読まれてきました。しかし現在では-gin₇ と読むのがより適切であることを示す十分な証拠があり、最後の/n/が脱落している可能性も示唆されています。したがって、GIM という記号は、過去には少数の初期の学者の間では-gi₁₈ あるいは-ge₁₈ とも読まれていました。実際の発音を決定するにあたっての困難は、-gi-im、-gi-in、-geen、-gi/ge、-ki/ke、-gé/ke₄ (最後の三つの例は、単一の符号に二つの読み方が可能なことを表す) のような多くの矛盾する音節表記が存在していることにあります。これらすべての形についての考察は、フレイン [12] を参照のこと。発音は時代や場所によっても異なる可能性があるため、ここでは単に-gin₇ と読む現在の慣例に従うこととし、時代や場所による正確な発音の問題は未解決とします。

ama-ni-gin ₇	彼の母のように
dumu-saġ lugal-la-gin ₇	王の最初に生まれた息子のように
a-ba za-e-gin ₇	誰があなたのように (であるか)?

覚えていて

副詞は通常、短い名詞連鎖で、-e、-eš、-šè、-bé、-bi-šèなどの格標識で終わる。

練習問題 1

名詞、代名詞、形容詞

以下の語をプラス（+）記号を使って形態素解析し、可能な代替訳があればそれに注意して訳しなさい。すべての形は絶対格の名詞連鎖で、その解析は-Ø で終わります。名詞複合語の形もあるので、用語集をよく確認すること。

- | | |
|------------------------------|--|
| 1 lú-ne | 14 gu ₄ -áb-hi-a |
| 2 é-é | 15 šu sikil |
| 3 dumu-dumu-ne | 16 bād sukud-rá |
| 4 diġir gal | 17 níġ-ba |
| 5 diġir-re-ne | 18 šeš bānda |
| 6 diġir gal-gal-le-ne | 19 nu ^{giš} kiri ₆ |
| 7 dumu zi | 20 níġ-gi-na níġ-si-sá |
| 8 hur-saġ galam-ma | 21 dumu-níta |
| 9 níta kal-ga | 22 a-ab-ba sig |
| 10 munus sa ₆ -ga | 23 dumu-munus |
| 11 nam-lugal | 24 dub-sar mah |
| 12 ki-sikil tur | 25 é-bappir |
| 13 ki Lagaš ^{ki} | 26 uzu ^{ti} , uzu ^{ti} -ti |

練習問題 2

名詞の複数形、所有代名詞と指示代名詞

注意して分析し、訳しなさい。用語集を活用して名詞複合体を見つけること。分析した鎖に絶対格の-Ø をつけることを忘れないように。

- | | |
|-------------------------------|---|
| 1 diġir-zu | 11 iri gal-me |
| 2 á dugud-da-ni | 12 nam-ti-ġu ₁₀ |
| 3 dumu-bi | 13 nam-ti-la-ni |
| 4 ama kal-la-ġu ₁₀ | 14 ur-saġ-zu-ne |
| 5 lugal-zu-ne-ne | 15 níġ-na-me |
| 6 ama-ne-ne | 16 igi zi-da-ni |
| 7 diġir-bé-ne | 17 dub-sar tur-ġu ₁₀ -ne |
| 8 diġir-ra-né-ne | 18 ki-tuš kù-ga-ni |
| 9 lú mah-bi | 19 a-a kal-la-ni |
| | 20 nin igi sa ₆ -sa ₆ -ġu ₁₀ |
| 10 ġú-ri | エンリルとスト 25 OB |

練習問題 3

名詞修飾格：所有代名詞と指示代名詞

分析し、訳しなさい。複数の解釈ができる場合はすべて示すこと。
他の格でない場合には絶対格の-Øをつけることを忘れないように。

この課題では、以下の格後置詞を使用する。

位格 -a ～で 終始格 -šè ～へ、～の方へ

- 1 é lugal-la
- 2 é lugal-la-na
- 3 é lú
- 4 é dumu-ne
- 5 é lú-ka
- 6 é lú-ne-ka
- 7 é-gal lugal-la
- 8 é-gal lugal-ba-ka
- 9 é-gal lugal-ĝá-šè
- 10 é diĝir mah-e-ne
- 11 é lugal-la
- 12 é diĝir-ba-gin₇
- 13 é mah diĝir gal-gal-le-ne-ka
- 14 nam-lugal iri
- 15 é-gal nam-lugal-la-ĝu₁₀-šè

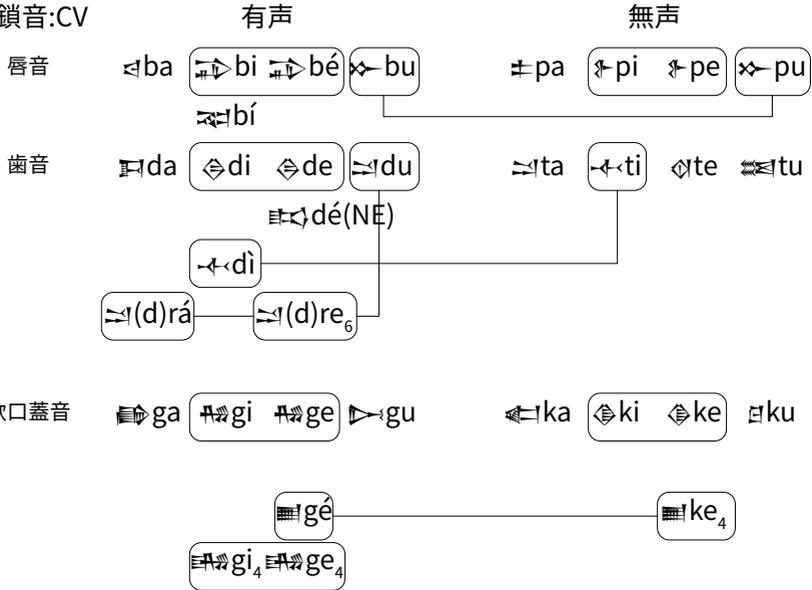
- 16 ama dumu-dumu-ne
 17 ama dumu-dumu-ke₄-ne-gin₇
 18 ir₁₁ zi dam lugal-la-ka
 19 ilugal kal-ga diĝir-ra-ni
 20 lugal-ĝá nam-kal-ga-ni
 21 é-ba diĝir mah-bi
 22 dumu-ne ama kal-la-ne-ne
 23 é-ĝá ^{giš}ig-bi
 24 lú iri-ke₄-ne é-é-a-ne-ne
 25 7 a-šà-ba-ka gú gibil-bi
 26 ká iri-šè
 27 ^{giš}ig ká iri-ka
 28 lú é-gal iri-ba-ka-ke₄-ne-gin₇
 29 é ^dnin-ĝír-su-ka
 30 dumu ^dnin-hur-saĝ-ĝá-ka-ke₄-ne
 31 nam-ti énsi-ka-šè
 32 ^dInana nin kur-kur-ra nin É-an-na-ka
 33 é me huš gal an-ki-ka-ni
 34 nu-bānda kù-dím-ne (OSP 2, 50 1:6/3:9 Oakk)
 35 ki-a-naĝ lugal-lugal-ne (RTC 316 Ur III)

音節記号価表：VVC CV

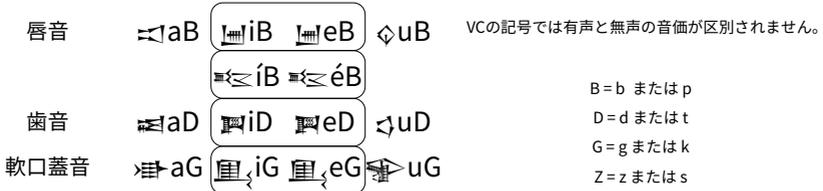
同じ記号を持つ音節を連結して図示しています。

母音 𐌆a 𐌇i 𐌈e <u 𐌉ú
 𐌆à 𐌇ì 𐌆ú 𐌉u₈

閉鎖音:CV



閉鎖音:VC



訳注: 読者の便利のため、記号価に対応する字形を標示しました。ここで使用したフォントはNoto Sans Cuneiformで、ウル第三王朝期の字形をもとにしたものです。

摩擦音

齒音

sa (si se) su
 za (zi ze) zu
 ze

aZ (iZ eZ) zuZ

硬口蓋音

ša (ši še) šu
 še

aš (iš eš) ūš

軟口蓋音

ha (hi he) hu
 hé

ah ih eh uh

鼻音

na (ni né) nu
 ne/dé
 ma (mi me) mu
 gá (gi₆ ge₂₆ gu₁₀)

*an (in en) un
 *am₆ (im em) um
 am
 *àm
 ág (ig èg) ùg

流音

la (li le) lu
 lá lí
 ra (ri re) ru
 rí ré
 rá re₆

al (il el) ul
 ar (ir er) ur
 ár úr

文献

- [1] Attinger, Pascal (1993). *Eléments de linguistique sumérienne: La construction de du11/e/di "dire"*. Fribourg, Switzerland / Göttingen, Germany: Editions Universitaires / Vandenhoeck & Ruprecht. <https://doi.org/10.5167/uzh-139536>
- [2] C. Mittermayer & P. Attinger, *Altbabylonische Zeichenliste der sumerisch-literarischen Texte*, Fribourg, 2006
- [3] R. Borger, *Assyrisch-babylonische Zeichenliste*, AOAT 33/33a, 1978-
- [4] J. A. Black, *THE ALLEGED "EXTRA" PHONEMES OF SUMERIAN*, *Revue d'Assyriologie et d'archéologie orientale* Vol. 84, No. 2 (1990), pp. 107-118
- [5] J. Black, "Sumerian Lexical Categories," *Zeitschrift für Assyriologie* 92, 2002
- [6] CDLI contributors. 2023. "Abbreviations." *Cuneiform Digital Library Initiative*. November 28, 2023. <https://cdli.mpiwg-berlin.mpg.de/abbreviations>.
- [7] Civil, M. 1987 "The early history of HAR-ra: the Ebla link" , in Cagni, L. (ed.), *Ebla 1975-1985, Dieci anni di studi linguistici e filologici* (Naples 1987), 131-58.
- [8] Civil and R. D. Biggs, "Notes sur des textes sumériens archaïques", *RA*, 60. (1966)
- [9] G. Cunningham, "Sumerian Word Classes Reconsidered," *Your Praise is Sweet: A Memorial Volume for Jeremy Black*, London, 2010, pp41-52
- [10] Dietz Otto Edzard, *Sumerian Grammar Handbook of Oriental Studies. Section 1 The Near and Middle East*, BRILL, 2003
- [11] The Pennsylvania Sumerian Dictionary Project, 2017 <http://oracc.org/epsd2>
- [12] D. Frayne, *Royal Inscriptions of Mesopotamia, Early Periods 1* (2008) 95
- [13] Marie-Louise Thomsen, *The Sumerian Language: An Introduction to Its History and Grammatical Structure*, Copenhagen Studies in Assyriology, Akademisk Forlag
- [14] Foxvog, Daniel A. 2022. "Elementary Sumerian Glossary (Revised 2022)." *Cuneiform Digital Library Preprints 2022* (3.1). <https://cdli.mpiwg-berlin.mpg.de/articles/cdlp/3.1>.
- [15] M. Fitzgerald, "pisan dub-ba and the Direction of Cuneiform Script," *CDLI Bulletin* 2003:2
- [16] I. J. Gelb, *MAD 2. Old Akkadian Writing and Grammar*, Chicago: University of Chicago Press, 1952, Second Edition
- [17] Green, M. W. "The Eridu Lament." *Journal of Cuneiform Studies*, vol. 30, no. 3, 1978, pp. 127-67.
- [18] Jagersma, Abraham Hendrik, *A descriptive grammar of Sumerian*, Faculty of the Humanities, Leiden University, 2010
- [19] F. Karahashi, "Relative Clauses in Sumerian Revisited. An Interpretation of lú and nîg from a Syntactic Point of View," *AV Jeremy Black* (2010) 165-171.
- [20] J. Klein & T. Sharlach, *Zeitschrift für Assyriologie* 97, 2007, 4 n. 16
- [21] J. Krecher, *Verschlusslaute und Betonung im Sumerischen*, in *AOAT* 1 ,1969, 157ff
- [22] J. Krecher, *Orientalia* 47 [Rome, 1978], 376-40
- [23] R. Labat, *Manuel d'Epigraphie akkadienne*, 1948-

- [24] G.Marchesi, "Lumma in the Onomasticon and Literature of Ancient Mesopotamia." *History of the Ancient Near East / Studies* 2006.
- [25] Y.Rosengarten, *Répertoire commenté des signes présargoniques sumériens de Lagaš*, 1967
- [26] Eric J. M. Smith, *Harmony and the Vowel Inventory of Sumerian*, *Journal of Cuneiform Studies* 59, 2007, 19-38
- [27] P. Steinkeller, *Orientalia* 51, Rome, 1982, pp358
- [28] P.Steinkeller, *Journal of Cuneiform Studies* 35, 1983, 249f
- [29] P.Steinkeller, *Journal of Near Eastern Studies* 46,1987,56 n.5
- [30] Steinkeller, Piotr. 1989. *Sale Documents of the Ur-III-Period. Vol. 17. Freiburger Altorientalische Studien. Stuttgart: Franz Steiner.*
- [31] P.Steinkeller, *Third-Millennium Texts in the Iraq Museum* ,1992, 47
- [32] P.Steinkeller, *Zeitschrift für Assyriologie* 71, 2001, 27
- [33] Å.Sjöberg, "Beitrage zum sumerischen Worterbuch," *Orientalia* 39, 1970
- [34] S. Picchioni, "The Direction of Cuneiform Writing: Theory and Evidence," *Studi Orientali e Linguistici* 2, 1984-85, 11-26
- [35] M. Powell, "Three Problems in the History of Cuneiform Writing: Origins, Direction of Script, Literacy," in *Visible Language* XV/4, 1981, 419-440
- [36] Rubio, Gonzalo. "46 Sumerian Morphology" In *Morphologies of Asia and Africa* edited by Alan S. Kaye, 1342-1394. University Park, USA: Penn State University Press, 2007. <https://doi.org/10.1515/9781575065663-049>
- [37] Yang Zhi, *The Name of the City Adab*, *Journal of Ancient Civilizations* 2, Institute for the History of Ancient Civilizations
- [38] Yoshikawa, Mamoru, *Acta Sumerologica* 12, 1990
- [39] Volk, Konrad 1997. *A Sumerian Reader*. Rome: Pontificio Istituto Biblico.

索引

A

adjectival modifier/形容詞的修飾語	30
adnominal/名詞修飾的	29
adverbial/副詞的	29
agent/動作主	39
agglutinative linkages/膠着連結	1
amissible consonant/脱落しやすい子音	41
analogy/類推	9
anticipary genitive/先行属格	37
anticipatory genitive/先行属格	32
apposition/同格	5
auslaut/末尾音	34

B

bahuvrihi attributive/バフブリーヒ属詞	6
--------------------------------------	---

C

chain formations/連鎖形成	1
chain/連鎖	1
classical OB Sumerian/OB の擬古シュメール語	14
clause/節	1

D

demonstrative force/指示力	20
determining force/決定力	21
dimensional case/空間格	23

E

elide/脱落	14
enclitic copula/前接コピュラ	6
epenthetically/語中音添加的	16
epenthetic vowel/挿入母音	16
epithet/形容語句	39
equative case/様格	29, 41
ergative case/能格	13

F

far-deixis/遠称	20
---------------------	----

G

genitive case/属格	29
genitive postposition/属格後置詞	30
gentilics/住民名	38

H

head noun/主要部名詞	1
helping vowel/助母音	14

I

infix/接中辞	41
-----------------	----

L

locative case/位格	14
locative-terminative case/位置・終止格	13

M

morphophoneme/形態音素	32
--------------------------	----

N

neutral term/中性語	24
nominal complex/名詞複合体	1

P

paratactic phrase/並列句	6
phonotactically/音素配列的	33
plural modifier/複數修飾語	30
PN/人名	39
postpositions/後置詞	29
predicative genitive/述語的屬格	38
prepositions/前置詞	29
productive/生產的	40
prosthetically/語頭音添加的	16

R

rank order/順序	1
rectum/被制辭	30
regens/制辭	30

V

verbal complex/動詞複合体 1, 11

verbal sentence/動詞文 1

W

word-boundary/語境界 33

Z

zero morph/ゼロ形態素 13

シュメール語文法入門 Vol2

2024年3月10日 初版

著者 ダニエル・A・フォックスヴォグ

翻訳 ゆー (uyum)

協力 hinoya

This work is adapted from "Introduction to Sumerian Grammar" by Daniel A Foxvog, used under CC BY 4.0.

Licensed under CC BY 4.0 by uyum.